

## 幼稚園から小学校への移行に関する発達心理学的研究 I

### A Study of the Transition from a Kindergarten to a Primary School I

進野 智子\*<sup>1</sup>

Tomoko SHINNO

小林 小夜子\*<sup>2</sup>

Sayoko KOBAYASHI

#### 目 的

移行 (transition) とは、一般にある状態から他の状態への道筋あるいは変化をいう (Ribaupierre, 1989)。人生においては様々な移行がある。山本 (1991) は、人生移行の観点から異なる環境への移行が、新しい環境へうまく適応できるかあるいは適応に失敗して何らかの不都合な事態を引き起こしてしまうかの分岐点であり、危機的場面であることを指摘している。

飯島 (1998) は、家庭から幼稚園への移行および幼稚園から小学校への移行に関して研究し、家庭から幼稚園への移行に際しては、次の4つの観点から言及している。すなわち、①母親・保育者との愛着、②親を支える道づれ (convoy)、③入園前の友人関係ときょうだい関係、④保育形態と適応の4点である。さらに、幼稚園から小学校への移行に際しては、子供を支える道づれの観点から「親や年長のきょうだいをはじめとする家族、幼稚園や水泳教室などの友人、近所の友人である。入学前友人の多い子どもは、少ない子どもより入学後『勉強が好き、学校が楽しい』などの学校適応を示す。親をはじめとする家族も幼稚園と小学校の環境の差異に悩む子どもに『サポート』を与えることによって移行期の問題を解決する事ができる」としている。

飯島は、倉橋理論の再考を卒園児の母親および児童を対象に、倉橋理論を実践している幼稚園と実践していない幼稚園をそれぞれ卒園した子供の縦断的研究を行った。飯島によれば、倉橋理論の実践によって、子供の自主性・社会性・個性を伸ばすことができると主張している。千羽 (1995) は、飯島に基づき就学前教育修了後の児童の自主性の発達および自主性の発達から見た小学校1年生の学校生活への適応について検討した。幼児の自主性の発達に関して、柏木 (1988) は、自主性を幼児の自己の成長の観点から「自己主張・実現」と「自己抑制」を対極とする次元で捉えている。筆者らは、柏木に基づき、自主性を「自己主張・実現」と「自己抑制」の観点から捉え、研究を進める。

山本ら (1981) は、小学校入学に伴う環境移行について、小学校入学児童と彼らを取り巻く環境 (学校や家庭) を別々のものとして切り離して捉えるのではなく、人間－環境の相互交流として捉えるべきであり、新入学児童と環境全体が一つのシステムを構成しているという見方をする。小学校入学は、子どもにとってばかりではなく母親にとっても危機的

\*1 著者たちは、調査に快くご協力くださいました幼稚園および小学校の先生方に心から感謝申し上げます。

\*2 玉木女子短期大学

事態であると考え、新入学児童の母親に対して二つの調査を行った。一つは、学校と家庭の連絡のために小学校で使われた連絡帳の分析であり、もう一つは、母親に対する面接であった。

LaddとPrice（1987）およびLadd（1990）は、幼児の行動観察および幼児の母親への質問紙による研究を行った。しかし、Laddらの研究は、横断的研究であり、幼児を対象とした研究も観察法であり、子供から直接に面接法によりデータを収集したものではない。

上述の幼稚園から小学校への移行に関する諸研究は、研究対象として子供およびその母親を対象とした研究である。幼稚園から小学校への移行に関して、幼児教育または小学校の教育機関における移行を考察するとき、移行する主体である幼児・児童、子供の親および教師の三者が重要な役割を果たすと考えられる。しかるに、従来の研究においては、子供の母親から資料を収集したり、子供の遊び行動を観察することにとどまっていた。三者の中、移行する主体である子供やその子供の教師を対象とした研究はその重要性がいわれながらも（飯島1998；千羽1995）着手されていなかった。

一方、教師を対象とした質問紙法に関しては、秋田・安見（1997）は、園児・児童を把握する際の保育者の見方に関する質問紙を作成しているが、これは保育者だけを対象として作成されたものである。また、近藤（1984）は、児童・生徒に対する教師の見方に関する研究である。幼稚園・小学校の両教育機関の教師に対して同一の質問紙に対する回答の比較がなされてこそ、幼稚園から小学校への移行に関する教師の認知の差異が浮き彫りにされることが考えられる。

山本ら（1981）のいうように、子供が幼稚園から小学校へ移行する際に、それぞれの教育機関における教師が幼児・児童をどのように把握するかによって、新しい教育機関への移行が円滑にいたり、不適応になったりすると考えられる。すなわち、幼稚園の教師が幼児を有能であると積極的に捉えているのに対して、小学校の教師は幼稚園から移行してきた児童を幼稚であると否定的に捉えているのではないか。この両教育機関における教師の幼児・児童の捉え方が、子供に反映しているのではないかと考えられる。さらに、この差異が児童の小学校への不適応につながっていくのではないかと考えられる。つまり、両教育機関の教師が幼児・児童に対して全般的にどのような印象を持っているかを明らかにする必要がある。また、併せて、両教育機関の教師が幼稚園教育をどのように認識しているかについても明確にする必要がある。さらに、幼児・児童の教育に際しては、幼児自身が経験してきた幼児教育に対する認知も大きく影響すると考えられる。飯島（1990）は、幼児教育に対するアンケート調査を行っているが、この調査は母親を対象としたものであり、児童の学校への適応に大きな影響力を持つ教師を対象としたものではない。

本研究の目的は、子供が幼稚園から小学校へ移行する際に、それぞれの教育機関における教師が幼児・児童をどのように把握（認知、以下認知という）するかによって、新しい教育機関への移行が円滑にいたり、不適応になったりすると考えられる。すなわち、幼稚園の教師が幼児を有能であると積極的にとらえているのに対して、小学校の教師は幼稚園から移行してきた児童を幼稚であると消極的にとらえているのではないか。この両教育機関における教師の幼児および児童の捉え方が、子供に反映しているのではないかと、さらに、この差異が児童の小学校への不適応につながっていくのではないかと仮説を設定した。また、移行する主体である子供に面接を行うことにより、子供の両教育機関に対す

る認知に差異がないか。もし、あるとすればその背景にあるものを明らかにしていくことである。

本稿は、次の2点について検討することを目的とする。すなわち、幼稚園教師および小学校教師に対して同一の質問紙による回答を求めることにより、①担任教師による園児・児童の捉え方の相違・幼稚園教育に対する幼稚園教師と小学校教師の捉え方の相違②幼稚園教師の小学校教師に対する要望および小学校教師の幼稚園教師に対する要望である。

## 方 法

**調査対象：**国公立幼稚園年長児担任教師9名（女性9名。年齢範囲21歳～30歳，平均年齢25.9歳），および国公立小学校1年生担任教師11名（男性4名，女性9名。年齢範囲23歳～59歳，平均年齢39.2歳）。この中，さらに後述の質問紙を用いて幼稚園教師2名が各担任クラスの園児61名を評定し，小学校教師1名は担任クラスの児童34名を評定した。

**手続き：**質問紙法による調査。質問紙は，次の①，②の2種より構成されている；①担任教師によるクラスの子供の全般的印象。この質問紙は，柏木（1988）の「教師による幼児の行動評定尺度」を使用した。この尺度は，71項目より成っており，4段階の評定を求められる。なお，柏木は，幼児を対象としているため，小学校教師に評定を求めるときには，表現を一部変えた（例；園生活を小学校生活に変更）。さらに，この質問紙は，担任教師による園児・児童の個別行動評定にも使用された。②の質問紙は，回答者の教職歴・幼稚園から小学校への適応に要する期間・幼稚園教育に対する捉え方・幼稚園教師から小学校教師に対する要望並びに小学校教師から幼稚園教師に対する要望から成る。幼稚園から小学校への適応に要する期間は，飯島（1990）の母親に対する質問項目の中，質問5の項目の一部「幼稚園から小学校への適応に要する期間」を使用し，5段階評定を求めた。幼稚園教育に対する捉え方に関しては，同様に飯島の質問3「幼稚園教育に関する認識」を使用し，4段階評定を求めた。幼稚園教師から小学校教師に対する要望並びに小学校教師から幼稚園教師に対する要望は自由記述によった。

**質問項目：**①担任教師による幼児・児童の全般的行動評定。質問紙①を使用。②幼稚園教育に対する幼稚園教師と小学校教師の認知。質問紙②を使用。③幼稚園教師から小学校教師に対する要望ならびに小学校教師から幼稚園教師に対する要望。質問紙③を使用。④教師による担任園児・児童の行動評定。質問紙①を使用。

**調査期間：**平成9年11月から12月。

## 結果と考察

### 1. 小学校への適応期間

幼稚園から小学校への移行に関して，両教育機関の教師に小学校への適応に要する期間の長さについて5段階評定を求めたところ，小学校教師と幼稚園教師の評定間に有意差は認められず，両者とも「比較的すぐに慣れると思う」と回答している。この結果は，「小学校は大人が考えているより身近な世界である」とする千羽（1995）の結果と一致するが，母親を対象とした調査を行い，倉橋理論実践園卒園児の小学1年生に不適応群が多く見られ不安を感じる母親も多かったことを明らかにした飯島（1990）と比較すると，母親の認識と教師の認識はずれており，この不一致について園児の聞き取りの必要性があると思われる。

## 2. 幼稚園教育に対する両教育機関の教師の捉え方

飯島（1990）の母親に対する質問項目の中、質問3の「幼稚園教育に関する認識」の25項目を採用し、「1. 全然ぴったりしていない」「2. ややぴったりしている」「3. かなりぴったりしている」「4. 非常にぴったりしている」の4段階評定を求め、それぞれの評定を1点から4点まで得点化し、統計処理した。教師の評定点が3.5点以上を幼稚園教育において重要と捉えている項目とした。両教育機関の教師が共通して重要としている項目は、「のびのび生活する」の一項目であった。

教師の評定点が1.5点以下の項目が重要でないとして捉えている項目とした。共通して重要でないとして捉えられている項目は、「文字・算数などの勉強」と「お稽古ごとの教室がある」の2項目であった。

表1は、両教育機関の教師の評定値に有意差のあった項目である。表中において、\*あるいは+が記入されている欄の方が高得点であったことを示す。幼稚園教師が小学校教師よりも重要と評定した項目は「遊び中心の生活」の1項目であり、逆に小学校教師が幼稚園教師よりも重要と評定した項目は、「創造性を伸ばす」・「友だちが多い」・「規律正しさ」・「動物や植物を愛する」・「協調性を重んじる」・「先生のいうことをよく聞く」の6項目であった。

このような相違は、両教育機関の教師が共通して重要としている項目「のびのび生活する」の捉え方の相違のように考えられる。この結果から、小学校教師によって高く評定された項目は多岐にわたっており、小学校教師が幼児教育に対して余りに多くのことを期待していると考えられる。

表1 幼稚園教育で重要と考えられている項目

質 問 項 目	幼稚園	小学校
7. 創造性を伸ばす		*
8. 友だちが多い		*
10. 規律正しさ		*
12. 動物や植物を愛する		+
18. 協調性を重んじる		+
20. 遊び中心の生活	+	
21. 先生のいうことをよくきく		+

注) +は10%水準で傾向のあることを示す。

\*は5%水準で有意差があることを示す。

## 3. 幼稚園教師から小学校教師に対する要望・小学校教師から幼稚園教師に対する要望

自由記述により、幼稚園教師から小学校教師に対する要望および小学校教師から幼稚園教師に対する要望が求められた。この要望の中、頻度の高かった項目は以下の通りである。幼稚園教師から小学校教師に対する要望としては、個に応じた指導・子供への丁寧な対応・友人の承認・子供の気持ちの理解・子供と一緒に沢山遊んでほしい・自己発揮するである。これに対して小学校教師の幼稚園教師に対する要望としては、基本的な生活習慣のしつけ・個性豊か・規律正しさ・協調性を重んじるであった。この要望に関しては、それぞれの教育機関の教師が幼稚園教育において重要と思っている項目と重なる部分が多く今後の分析・

検討の余地が残されている。

#### 4. 担任クラスの園児・児童の全般的印象

幼稚園教師9名と小学校教師11名による担任クラスの園児・児童の全般的行動が、柏木（1988）の「教師による行動評定尺度」の中、自己主張・実現の尺度と自己抑制の尺度から検討された。前者の尺度は「拒否・強い自己主張」、「遊びへの参加」、「独自性・能動性」の3つの下位次元から成り、後者は「遅延可能」、「制止・ルールへの従順」、「フラストレーション耐性」「持続的対処・根気」の4つの下位次元から成る。合計7つの下位次元から成る71項目が、「1. ほとんどない」「2. 少ない方」「3. やや多い」「4. きわめて多い」の4段階によって評定され、それぞれの評定段階を1点から4点まで得点化し、統計処理を行った。

図1は、幼稚園教師と小学校教師による担任クラスの児童の全般的行動尺度の評定結果を示す。図1において、図中のA～Cは、自己主張・実現の尺度に関するA「拒否・強い自己主張」、B「遊びへの参加」、C「独自性・能動性」の3つの下位次元を示し、D～Gは、D「遅延可能」、E「制止・ルールへの従順」、F「フラストレーション耐性」、G「持続的対処・根気」の4つの下位次元を示す。数値は、評定の平均点である。

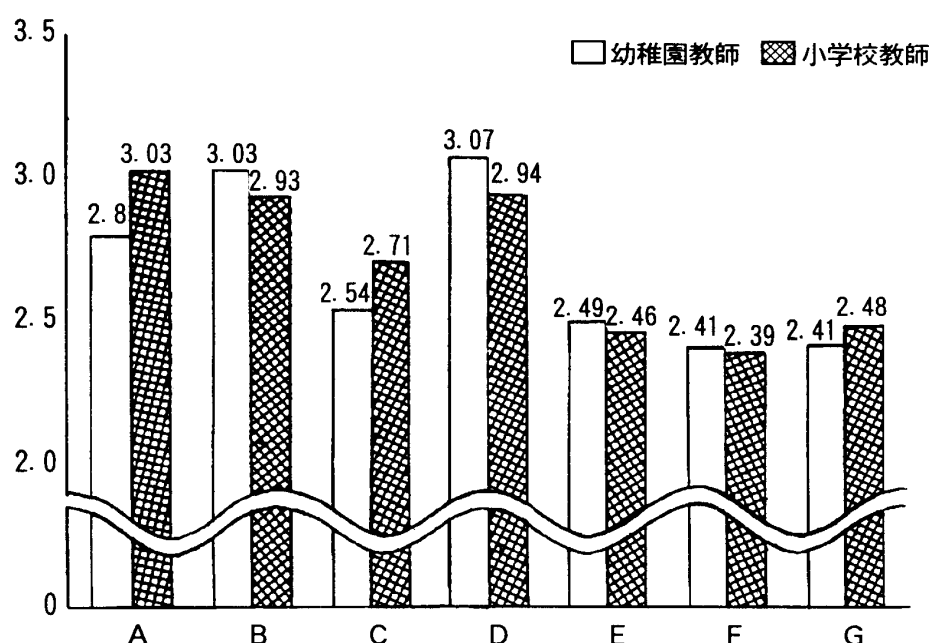


図1 幼稚園教師と小学校教師による担任クラスの行動評定

幼稚園教師が年長児を、小学校教師が小学1年生を捉えたクラス全般の行動評定には、どの下位次元にも有意差は、見られなかった。

幼稚園年長児と小学校1年生を対象とした両対象児間には1年の生活年齢の差があるにもかかわらず、両教育機関の教師の捉え方に差がない、つまり、小学校1年生も幼稚園年長児も同様に捉えられていることを示す。換言すれば、小学校教師は、小学1年生を「幼稚園である」と捉えていることを示唆すると考えられる。

#### 5. 担任教師による園児・児童の個別的行動評定

担任教師によって園児・児童が前記4.において使用された質問紙によって評定された。

表2は、担任教師による園児・児童の個別的行動評定の中、幼稚園教師と小学校教師の評定値間に有意差のあった項目を示す。

幼稚園教師が小学校教師よりも優位に高い評定をした項目は、自己主張・自己実現に関する次元の中、遊びへの参加に関する全項目、独自性・能動性に関して、“遊び方や制作などにアイデアを持っている”、自己抑制の次元に関して、遅延可能に関する全項目、制止のルールへの従順の下位次元の中、“してはいけないと言われたことはしない”、“園での決まりをいちいち言われなくても守れる”、フラストレーション耐性に関する下位次元の中、“他の人と同じものを欲しがらる”である。これらの項目は、自己抑制の下位次元の中のフラストレーション耐性に関する項目“他の人と同じものを欲しがらる”を除いて、幼稚園教師が幼稚園年長児を自主性が発達していて、自己主張や自己抑制が可能であると捉えていることを示している。

表2 担任教師による園児・児童の個別的評定

	質 問 項 目	幼稚園	小学校
自己主張・実現 拒否・強い自己主張	有意差の見られた項目なし		
自己主張・実現 遊びへの参加	23. 遊びたい玩具を友だちが使っている時“貸して”と言える。 9. こっこ遊びなどでやりたい役が言える。 2. 好きな玩具、遊びたい玩具を選んでとれる。 26. してほしいこと・ほしい物をはっきり大人に頼める。	* * * * * * * * *	
自己主張・実現 独自性・能動性	5. 遊び方や制作などにアイデアを持っている (教師に一々きかずに、自らのアイデアでどんどんする) 14. 新しい遊びや難しそうな課題に興味を持つ 24. 人から促されないと行動が起こせない	*	* * *
自己抑制 遅延可能	38. (ブランコやすべり台など) 遊びの中で自分の順番を待てる。 69. “後であげます”と言えは待てる。 71. 自分の持ち物と他人の持ち物を間違えずに区別できる。 60. 遊びのルールが守れる (ズルをしたり、ごまかししたりしない) 33. 教えられたことを理解し、教示どおりに実行できる。 31. “ちょっと待っていなさい”で待てる。 50. おやつが配られるのを待てる。 35. 友だちとおもちゃの貸し借りができる。 51. 集団の中で我慢できる。 61. 相談や大勢で話しているとき、自分の順番を待てる。 63. 相手の話を終わりまで聞ける (⇒自分の言いたいことをまず最初に言いたがる)。 58. 教師に話かけたい時、他の子が話している間待っている。	* *	
自己抑制 制止・ルールへの従順	6. 制止するとわざととする。 15. 人の目を引こうと目立ったことやかわったことをしてみる。 36. “してはいけない”と言われたことはしない (人から一々注意されなくても) 52. 園での決まりを一々言われなくても守れる。	* * * * * *	* * * * * *
自己抑制 フラストレーション耐性	42. 仲間とくい違ったときは願望を抑える。 70. 他の人と同じもの(お弁当箱や服など)を欲しがらる (⇒人と違っていても我慢できる)	* * *	* *
自己抑制 持続的対処・根気	11. ちょっと失敗したりうまくいかないと、すぐあきらめてしまう。 1. 人のまねをする		* * * * *

注) \*は5%水準で有意差があることを示す。  
 \*\*は1%水準で有意差があることを示す。  
 \*\*\*は0.1%水準で有意差があることを示す。

これに対して小学校教師が幼稚園教師よりも有意に高い評定を示した項目は、自己主張・実現の下位次元の中、独自性・能動性に関して、“新しい遊びや難しそうな課題に興味を持つ”、“人から促されないと行動が起こせない”、自己抑制の下位次元の中、制止のルールへの従順に関する“制止するとわざととする”、“人の目を引こうと目立ったことや変わったことをしてみる”、フラストレーション耐性の下位次元の中、“仲間とくい違ったとき

は願望を抑える”，持続的対処・根気の下位次元の中，“ちょっと失敗したりうまくいかないと，すぐあきらめてしまう”，“人のまねをする”であった。これらの項目の中，“新しい遊びや難しそうな課題に興味を持つ”，“仲間とくい違ったときは願望を抑える”の2項目を除いて，小学校教師が小学1年生を厳しく評定していることを示している。この小学校教師と幼稚園教師の評定項目間の有意差の見られた項目は，それぞれの教師が園児・児童をどのように認知しているのかを示唆するものとして興味深い。

本稿では，教師が園児・児童の幼稚園から小学校への移行をどのように認識しているかに関する予備的報告であるが，両教育機関の教師自身は，子供の小学校への移行にはあまり時間がかからないとしているにもかかわらず，幼稚園教育で重要であると考えていることに関して不一致が見られたこと，さらに，担任クラスの子供の個別的評定の差異を比較すると小学校教師と幼稚園教師の間には，認知の差異があることが明らかにされた。筆者らは，これらの背景にある諸要因を明らかにするためにさらに検討を続けていく。

## 要 約

幼稚園から小学校への移行に関して，幼稚園教師9名，小学校教師11名を対象に質問紙により検討された。その結果，以下のことが明らかにされた。

1. 小学校への適応には，両教育機関の教師ともあまり時間がかからないと捉えている。
2. 幼稚園教育に関して，重要と捉えていることには幼稚園教師と小学校教師の間には不一致が見られた。
3. 幼稚園教師から小学校教師に対する要望，また，小学校教師から幼稚園教師に対する要望には，上記2の結果と同様に，幼稚園教師が遊び中心・個の重視と考えているに対して，小学校教師は基本的生活習慣のしつけ・協調性を重んじていた。
4. 幼稚園教師と小学校教師による担任クラスの年長児と小学校1年生の全般的印象には，有意差が見られなかった。
5. 幼稚園教師は，担任クラスの年長児を自己抑制と自己主張・実現が可能であると捉えているのに対して，小学校教師は，小学校1年生を自己抑制と自己主張・実現が困難であると捉えていた。

## 引用文献

- 秋田喜代美・安見克夫 園児を捉える保育者の見方 －R C R T法による検討－ 立教大学心理学科研究年報 39, 33～41, 1997.
- 千羽喜代子・酒井仁美・平井信義・近藤千恵子・豊田君夫 就学前教育終了後の児童の自主性の発達 大妻女子大学紀要－家政系－, 29, 175-181, 1993.
- 千羽喜代子・酒井仁美 自主性の発達からみた小学校1年生の学校生活への適応 大妻女子大学紀要－家政系－, 31, 219-227, 1995.
- 飯島婦佐子 幼稚園と小学校への移行 「性格心理学ハンドブック」福村出版, 788～789, 1998.
- 飯島婦佐子 生活をつくる子供たち 倉橋惣三理論再考 フレーベル館, 1990.
- 柏木恵子 幼児期における「自己」の発達 行動の自己制御機能を中心に 東京大学出版会, 1988.
- 近藤邦夫 児童・生徒に対する教師の見方を捉える試み －その1 方法について－ 千葉大学教育工学研究 5, 3～27, 1984.
- Ladd, G. W. Having Friends, Keeping Friends, Making Friends, and Being Liked by Peers in the Classroom: Predictors of Children's Early School Adjustment? *Child Development*, 61, 1081-1100, 1990.
- Ladd, G. W. & Price, J. M. Predicting Children's Social and School Adjustment Following the Transition from Preschool to Kindergarten. *Child Development*, 58, 1168-1189, 1987.
- Ribaupierre, A. Epilogue: On the use of longitudinal research in developmental psychology. In *Transition Mechanisms in Child Development*. (Ed. Ribaupierre, A), 297-317, Univ. Cambridge Press, 1989.
- 山本多喜司 人生移行の発達心理学 北大路書房, 1991.
- 山本多喜司・利島保・石井眞治・藤原武弘・福田廣・浅川潔司・古川雅文・南博文 幼児の生活環境拡大の微視発生に関する比較文化的研究 昭和53-55年度科学研究費補助金一般研究(B)課題番号15401研究成果報告書, 1981.